（第２号様式）

令和７年３月 26 日

神奈川県教育委員会教育長　殿

県立相模原城山高等学校長

令和６年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 (令和6年度策定)	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月７日実施）	総合評価（３月 21 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒の学習意欲を高めるため、組織的な授業改善の充実に取り組む。単位制の利点を生かせる教育課程を実践する。 ②Ⅲ期「ICT 利活用」「プログラミング教育」の研究推進校として、研究と実践を深める。	①「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善と ICT を活用した探究的な学びの充実を図る。 ②指定校事業の研究や実践を授業改善に活用し、「総合的な探究の時間」等を含む全教科への取組として推進する。	①基礎学力の定着を図る。授業では、調べ学習や発表の機会、振り返りの時間を多く設け、ICT の効果的な活用方法を研究し、情報共有を行う。 ②全ての科目でプログラミング的な思考を意識した授業展開を行う。公開研究授業を実施し、その成果を広く発信する。	①生徒が主体的に授業に取り組み、学習意欲や興味関心を高めることができたか。ICT の効果的な活用により、生徒の理解が深まったか。 ②生徒が教科指導を通して、プログラミング的思考を意識し、教科の理解や探究的活動等に、その視点を広げ活用することができたか。	①毎時の授業の振り返りや年２回の生徒による授業評価から、生徒が主体的に授業に取り組むことができている。モニターやロイロノートも積極的に活用している。 ②年２回の授業互見週間を行った。２回目には公開研究授業を実施し、「プログラミング教育を意識した授業」「見通しを持ち、文理横断的な探究的な学びを意識した情報活用能力の育成」というテーマで議論した。	①生徒の学習意欲や興味関心を高めるために、他校への視察結果もふまえて ICT のより効果的な活用方法や先進的な取組について研究する。 ②全ての科目で、ICT を効果的に活用し、プログラミング的な思考を意識した授業展開を行っているが、さらに効果的な授業の展開や探究的活動につながる学びを模索する必要がある。	①生徒が主体的に授業に取り組んでいる。１人１台端末の積極的な利活用をはじめ、今後も先進的な取組に期待する。また、保護者に１人１台端末の活用状況について、周知することが望ましい。 ②プログラミング的思考の一つの形として、見通しをもった授業展開や、目標に向かってスモールステップで着実に力を身に付けさせることなどが挙げられる。アンケート結果をふまえ、さらに授業を工夫してほしい。	①来年度から全年次で新校の教育課程が実施されることとなる。来年度の年間行事予定の大幅な見直しは、２学期制を意識したものに改善されたと言える。１人１台端末の積極的な活用と周知は、今後も引き続き取り組んでいく。 ②ICT 利活用授業研究推進校とプログラミング教育研究推進校の指定校事業については、一定の成果が見られた。来年度から、指定校事業がプログラミング教育研究推進校に一本化されるが、引き続き実効性のある研究に取り組みたい。ICT の活用と直接体験を伴う領域とのバランスを取ることがポイントである。	①教育課程における選択科目の配置や組合せ、展開方法等について更に検討や改善を重ねていく。全職員が ICT 機器を有効活用する中、１人１台端末とロイロノート、来年度導入される電子黒板の有効活用が求められている。保護者に対する１人１台端末の活用状況の周知については、今後研究していく。 ②授業では、プログラミング的思考や探究的な学びをキーワードにして、引き続き授業改善に取り組んでいく。また、プログラミング的思考を、学校行事や日々の学校生活に活用できるよう、今後も研修や自己研鑽の機会を充実させる。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	①学校行事や部活動の活性化を通して、生徒の主体性と協調性を育み、社会性の涵養を図る。 ②生徒一人ひとりに対するきめ細かな支援と規律正しい学校生活への指導の充実を図る。	①様々な学校行事と部活動への積極的な取り組みを充実させ、学校全体の活力とする。また、交通安全教育と人権教育の充実を図る。 ②生徒情報を共有し、多様な生徒の理解を深めることで、個に応じた適切な支援を行う。また、規範意識の向上に努める。	①学校行事では、生徒主体の活動を実践し、新しい工夫を取り入れる。また、部活動への積極的な参加と入部を促す。交通安全教育を強化し、スケアードストレイトを実施する。 ②様々な場面で生徒情報を共有し、SC・SSW と連携しながら適時にケース会議を実施する。相談窓口を広げ周知する。学校生活アンケート、サポートドックの結果をより効果的に活用する。	①生徒が、学校行事や部活動を通して、学校生活や日常の生活に改善が見られ、アンケート等の結果から充実感や達成感が得られているか。交通安全に対する意識を高められたか。 ②家庭や外部機関との連絡を密にし、組織的に支援ができたか。生徒がより相談しやすい環境を整えられたか。アンケート結果等を上手く活用できたか。	①生徒主体の活動を推進し、文化祭や体育祭など、生徒の実行委員会を有効活用した。また、県教育委員会や県トラック協会、近隣の中学校と連携し、スケアードストレイトを実施した。 ②教育相談予約フォームを活用することによって、生徒が SC、SSW に相談しやすい環境を構築した。また、サポートドックを通して、生徒の課題についての早期把握や学校内の連携体制を確立した。	①実行委員会を通して生徒から行事運営についてアイデアを引き出せるよう、働きかけるとともに、生徒に部活動の加入を促していく。 ②引き続き県教育委員会、地域、家庭と連携し、交通安全教育やいのちの教育を粘り強く進める。 SC、SSW の積極的な活用を推進するとともに、外部機関（児童相談所等）との連携を強化し、実効性の高い教育相談体制を構築する。	①学校行事を通して、生徒の自己有用感を高められることが望ましい。体育館耐震工事や第一グラウンド使用不可の制約があるものの、部活動加入率の向上について引き続き取組をお願いする。 ②スケアードストレイトは、交通安全教育としての教育効果も高いのではないか。通学時における自転車のマナーや交通安全について考える機会となった。 サポートドックで生徒の課題の把握に努めつつ、外部機関、SC、SSW との連携により、個別相談の充実や積極的な運用に努めてほしい。	①新入生説明会における部活動紹介や生徒間の勧誘を通して、部活動への参加を促している。現状で５割程度の入部率を引き上げる工夫が求められている。また、生徒主体の行事にするために、いかに生徒の声や力を取り入れていくかが課題である。 ②スケアードストレイトは、生徒に事故の実態を直に見てもらう良い機会となった。一方で、鮮烈な記憶は時間とともに薄れていくので、普段から粘り強く指導していく必要がある。 サポートドックでは、アラートの出た生徒を中心に丁寧に面談を行い、課題の把握を行っている。アラートの出なかった生徒で、課題を抱えている生徒の発見と働きかけが課題である。	①体育館の耐震工事に伴い、体育館競技を中心に旧・相模原総合高等学校を活用するなど、様々な工夫を行って、部活動を維持している。また、部活動の広報活動や顧問の相互研修を実施するなど、部活動加入率アップに向けた取組も求められている。さらに、生徒委員を活用しながら、生徒主体の行事に向けて工夫することが望ましい。 ②スケアードストレイトの行事だけではなく、普段からの絶え間ない指導や注意喚起によって、実際の事故を減らしていくことが求められている。今後とも生徒をよく観察し、変化や兆候をいち早くとらえ、生徒の課題の発見と働きかけを粘り強く取り組んでいく。

	視点	４年間の目標 （令和6年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月７日実施）	総合評価（３月21日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
３	進路指導・支援	①進路希望の実現に向けて、生徒一人ひとりが主体的に目標を設定し、計画的に実行できる指導・支援の推進を図る。 ②生徒の多様な進路実現に向けて、有益かつ早く正確な情報提供を行う。	①生徒が主体的に進路選択できるように、校外での体験や三者面談の充実を図る。 ②「総合的な探究の時間」を活用したキャリア教育を充実させ、計画的で効果的なガイダンスを実施する。外部業者と連携を図る。	①年次進行に合わせて、計画的で効果的なガイダンスを実施する。三者面談を活用し、個々の進路に応じた、きめ細かい進路指導を行う。 ②「総合的な探究の時間」の進路探究活動、校外での体験や外部テストの活用の充実を図る。また、ガイダンスの内容を工夫し、正確で有益な情報提供にはICTを活用する。	①生徒が主体的に目標を設定し、多くの生徒が希望の進路を実現できたか。「総合的な探究の時間」による進路探究活動等に新しい工夫があったか。 ②コンソーシアムサポーター拠点校として、その活動を支援し、より多くの生徒が有益な活用をすることができたか。	①生徒ガイダンスや三者面談を通して、生徒の進路希望の実現につなげた。また「総合的な探究の時間」では、小論文対策等の外部テストを活用した。 ②コンソーシアムサポーター拠点校として、インターンシップ（看護実習を除く）に21名の生徒が参加し、体験的な学びを通して職業観や勤労観を育んだ。	①外部講師の有効活用など、体験の機会を増やして、生徒ガイダンスを充実する。また、志望理由書やエントリーシート、面接練習など個の支援を充実する。 ②引き続き、インターンシップの充実を図るとともに、コンソーシアムサポーター拠点校の次年度への引継を円滑に行う。	①総合型選抜等にも対応できるよう生徒に多様な視点や生き方を学ぶ機会を増やしたい。外部講師の活用は効果があった。高校３年間及び将来を見通した進路指導・キャリア教育を推進してほしい。 ②インターンシップによって、生徒の勤労観の育成や、キャリア選択、自己理解にもつながっている。企業と学校とでWin-Winの関係を築いてほしい。	①総合的な探究の時間等における外部講師の活用は、生徒から大変好評であった。小論文の外部テストの導入は、生徒に改善すべき箇所をわかりやすく示す効果があった。 ②インターンシップの事業所の中には、様々な事情を抱えていることをふまえ、受入れ先の事業所の確保が課題である。コンソーシアムサポーターの引継を円滑に進め、引き続きインターンシップの充実を図る。	①外部講師の活用や小論文の外部テストの導入は成果があったが、より効果的な方法について、引き続き研究を進めたい。また、生徒ガイダンスや三者面談などの取組も引き続き充実させていく。 ②コンソーシアムサポーター配置制度で培ったノウハウを活かしつつ、インターンシップへの参加を生徒に促していく。生徒への情報周知や事業所との綿密な連携も、この事業の成否の鍵となる。
４	地域等との協働	①地域との交流や協働を深め、地域に信頼され開かれた学校づくりを推進する。 ②外部（近隣小中学校・大学・専門学校等）との連携や協働を強化し、地域の教育力を積極的に取り入れる。	①本校の情報を地域に発信するとともに、生徒が職業体験等で地域に参画することを通して地域との連携を深める。 ②大学との連携授業や地域の学校との様々な連携を継続し、新たな取組についても検討する。	①本校の教育活動の取組をホームページや広報誌等で、地域や保護者に積極的に発信する。 ②外部との連携や協働に、多くの生徒が積極的に参加できるよう工夫し、地域の教育力を活用する。	①情報発信や地域に貢献することで、本校の教育活動が理解され、信頼感が高まったか。 ②地域の教育力を活用することで、生徒の自己肯定感を育むことができたか。新たな取組を模索することができたか。	①学校行事や授業の様子などをホームページで積極的に発信した。ひまわりクラブが、地元の公民館等で発表を行った。10月の「オープンスクール」では、中学生や保護者に授業や部活動を公開した。 ②神奈川工科大学との連携講座「ロボットプログラム制御」を生徒が受講した。	①本校が地域に愛され信頼されるよう、日頃の取組や特色を積極的に発信する。「オープンスクール」の取組をさらに充実させ、広報活動の一翼となるよう工夫する。 ②地域や大学、短大等との連携を一層強化する。	①「オープンスクール」やPTA「ふれあい花壇」整備は、本校と地域をつないでいる。中学生と本部役員、小学生と部活動部員の交流も大変有意義であった。DIG訓練を通して「共助」を考える機会にしてほしい。 ②大学との連携講座など、今後も地域の力を借りながら、生徒の能力を伸ばしてほしい。	①「オープンスクール」は、地域に開かれた学校として意義あるものであった。PTAの「ふれあい花壇」や文化祭などの行事に加えて、本校と地域をつなぐツールをさらに模索する必要がある。 ②ひまわりクラブや生徒会役員だけでなく、有志の生徒や他の部活動部員が地域に出ていく取組があってもよいのではないか。	①本校と地域をつなぐツールを大事にしながら、PTAとの連携を今後も推進し、地域とのつながりを深めていく。DIG訓練についても、今後工夫したい。 ②中高連携、高大連携、を活用しながら、生徒が直に地域と関わる機会を増やすための方策を考えたい。
５	学校管理 学校運営	①生徒の安全・安心な学校生活を維持するため、すべての職員が様々な変化に速やかに対応し、積極的に課題に取り組む組織を構築する。 ②風通しの良い職場環境を心掛け、事故・不祥事防止に努める。また、学校運営協議会を活用することで、組織的な課題解決力の向上を図る。	①教職員一人ひとりが業務の効率化、改革と協働に取り組み、課題の解決に向けて相談しやすい職場環境を醸成する。 ②働き方改革の推進と事故・不祥事防止の両立について職員の意識を高め、研修会や日常の声かけ、注意喚起等の活動からリスクの低減を図る。	①年次、グループや職員間の連携と協働を意識し、連絡や相互の声掛けを大切にすることで、些細な事でも相談しやすい職場環境を整える。衛生委員会を活性化させる。 ②年間の計画やタイムスケジュールを見直す。効果的な研修を実施し、教職員一人ひとりが、自身の問題として考えられるよう工夫することで事故・不祥事防止に努める。	①学校の課題を整理し、１つ１つの業務を見直すことで、組織的に効率よく業務を推進することができたか。協働しながら進める業務が増加したか。 ②働き方改革への理解が進んだか。事故・不祥事防止が徹底できたか。学校運営協議会を活用することができたか。	①企画会議を通して、学校の課題を整理するとともに、業務の見直しを行った。また、衛生委員会を定期的に開催し、職場環境の改善につなげた。 ②職員会議で、時間外在校等時間の情報を共有し、働き方改革への理解を進めた。事故・不祥事防止研修会を定期的に開催し、職員の意識を高めた。学校運営協議会では、様々な視点から、学校運営に係る貴重なご意見をいただき、活用できた。	①教職員一人ひとりがグループ相互の連携と協働を意識しながら、業務を推進することが望ましい。衛生委員会を活用するなど、職場環境の改善に努めること。 ②引き続き、働き方改革を推進するとともに、事故・不祥事は誰でも起こり得るという共通理解のもと、引き続き、日常の声かけや注意喚起を通して、事故・不祥事防止に取り組んでいく。	①業務の効率化に努めるとともに、衛生委員会を活性化させ、職場環境の改善に努めること。協働しながら進める業務の増加については、目標設定も含めて吟味が必要である。 ②時間外超過勤務の改善に向けて業務の効率化と働き方改革の一層の推進をお願いする。教職員一人ひとりが、当事者意識をもって事故・不祥事防止に努めてほしい。日頃からお互いに注意喚起ができる職場の雰囲気をつくることが望ましい。	①各グループで業務改善に努めるとともに、企画会議を通して学校全体の視点から、業務を見直し、効率化に努めた。また、衛生委員会の定期的な開催により、職場環境を改善した。 ②働き方改革については、勤務時間管理システムを活用することで、職員の意識が変わりつつある。また、定期的な不祥事防止会議の開催と日頃の注意喚起により、職員の意識は着実に高まっている。風通しの良い職場環境を構築し、事故・不祥事を起こさせない環境づくりが求められている。	①各グループによる業務改善を推進するとともに、年間行事など、全体の動きをふまえた業務の整理も必要である。また、今後も職場環境の改善に向けて衛生委員会を定期的に開催していく。 ②働き方改革を推進するためには、職員の意識だけでなく、業務の絶対量を減らすことも必要である。また、事故・不祥事を自分事としてとらえることやヒヤリハットを共有し、事故防止に向けて何ができるのか、一つひとつの積み重ねが大切である。